

2026年6月20日(土)**シンポジウム**

◆ オンデマンド配信あり

9:00 ~ 10:20 | 第1会場（ウインクあいち 2F 大ホール）

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

[SY1-座長] [座長抄録] 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

*武部 純¹、*田中 譲治² (1. 愛知学院大学歯学部有床義歯学講座、2. 東関東支部)

[SY1-1] 保険診療で磁性アタッチメントを使用する理由とは何か

*永田 和裕¹ (1. 関越支部)

[SY1-2] 歯科用磁性アタッチメントの構造とニッケルフリー化の試み

*高橋 正敏¹ (1. 北海道医療大学)

[SY1-3] 超薄型磁性アタッチメントの可能性

*石田 雄一¹ (1. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野)**シンポジウム**

◆ オンデマンド配信あり

9:00 ~ 10:20 | 第3会場（ウインクあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

[SY6-座長] [座長抄録] 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

*隅田 由香¹、光永 幸代² (1. 日本歯科大学生命歯学部 歯科補綴学第1講座、2. 横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学)

[SY6-1] 歯科外来における口腔機能管理を通じた栄養への取り組み

*上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

[SY6-2] ライフステージに応じた栄養課題と咀嚼機能の役割

*池邊 一典¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

[SY6-3] 「口から「食べる」と栄養治療の連携戦略」

*石井 良昌¹ (1. 日本大学松戸歯学部 口腔外科学講座)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

10:30 ~ 11:50 | 第1会場（ウインクあいち 2F 大ホール）

シンポジウム2（医療問題検討委員会） CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀（北医療大）、柏木 宏介（大歯大）

[SY2-座長] [座長抄録] CAD/CAMブリッジの現状と展望

*會田 英紀¹、*柏木 宏介² (1. 北海道医療大学クラウンブリッジ・インプラント補綴学分野、2. 大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座)

[SY2-1] コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの基本的な考え方

*新谷 明一¹ (1. 日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座)

[SY2-2] CAD/CAMブリッジの医療保険への導入の期待

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

[SY2-3] ハイブリッドレジンブロックによるCAD/CAMブリッジの臨床的有効性

*疋田 一洋¹ (1. 北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系デジタル歯科医学分野)

[SY2-4] 二層構造を有するCAD/CAMブリッジの臨床的意義

*小川 匠¹ (1. 鶴見大学歯学部クラウンブリッジ補綴学講座)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

10:30 ~ 11:50 | 第3会場（ウインクあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

[SY7-座長] [座長抄録] 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

*小山 重人¹、*梅原 一浩² (1. 東北大学病院・顎顔面口腔再建治療部、2. 東北・北海道支部)

[SY7-1] 天然歯とインプラント体の混在歯列における咬合の変化を考察する

*神野 洋平¹ (1. 九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野)

[SY7-2] 天然歯とインプラント体に維持を求めたRPD～ICRPDを考察する

*中居 伸行¹ (1. 長崎大学/関西支部)

[SY7-3] 天然歯喪失から終末歯列に至るインプラント補綴移行戦略を考察する

*向坊 太郎¹ (1. 九州歯科大学口腔再建補綴学分野)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

13:50 ~ 14:40 | 第1会場（ウインクあいち 2F 大ホール）

シンポジウム3 ノンメタルクラスデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

座長：伊藤 誠康（日大松戸）、大山 哲生（日本大）

[SY3-座長] [座長抄録] ノンメタルクラスデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

伊藤 誠康¹、*大山 哲生² (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座、2. 日本大学歯学部歯科補綴学第II講座)

[SY3-1] ノンメタルクラスデンチャーの臨床の勘所と展望

*谷田部 優¹ (1. 東京支部)

[SY3-2] ノンメタルクラスデンチャーの材料と製作法

*濱中 一平¹ (1. 福岡歯科大学 咬合修復学講座 有床義歯学分野)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

13:50 ~ 14:40 | 第3会場（ウインクあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム8（研究企画推進委員会） リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

座長：笛木 賢治（科学大）

[SY8-座長] [座長抄録] リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

[SY8-1] リアルワールドデータ解析における統計的留意点

*平川 晃弘¹ (1. 東京科学大学)

[SY8-2] 「シンポジウム8」はじめてのNDB歯科研究：基礎知識とテーマ選びのポイント

*河野 英子¹ (1. 国立健康危機管理研究機構)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

14:50 ~ 15:40 | 第1会場（ウインクあいち 2F 大ホール）

シンポジウム4（医療問題検討委員会） このままで良いのか？医療保険における補綴診療！～持続可能な制度構築をめざして～

座長：大久保 力廣（鶴見大）、金沢 紘史（日本顎咬合学会）

[SY4-座長] [座長抄録] このままで良いのか？医療保険における補綴診療！～持続可能な制度構築をめざして～

*大久保 力廣¹、*金沢 紘史² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 日本顎咬合学会)

[SY4-1] これでいいのか！金属修復治療

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

[SY4-2] 長期QOLと持続可能性からみる補綴の保険給付と私費の在り方

*猪原 健¹ (1. 中国・四国支部)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

15:50 ~ 17:50 | 第2会場（ウインクあいち 6F 展示場604+605）

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

[SY5-座長] [座長抄録] 補綴前処置を極める

*萩原 芳幸¹、*和田 誠大² (1. 日本大学歯学部歯科インプラント科、2. 大阪大学大学院歯学研究科有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

[SY5-1] 補綴処置の難易度を考えた、補綴前外科処置についての提案

*新名主 耕平¹ (1. 東京支部)

[SY5-2] 補綴前処置としての歯周治療の果たすべき役割

*菊池 毅¹ (1. 朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 歯周病学分野)

[SY5-3] 補綴前処置としての矯正治療の適応と治療戦略

*犬伏 俊博^{1,2} (1. 大阪大学大学院歯学研究科顎顔面口腔矯正学講座、2. 大阪大学歯学部附属病院矯正科)

[SY5-4] 1 歯単位から 1 口腔単位までの補綴前処置の必要性を補綴医の視点で再考する

*和田 淳一郎¹ (1. 東京科学大学大学院医歯学総合研究科生体補綴歯科学分野)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

15:50 ~ 17:50 | 第3会場（ウイंकあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

[SY9-座長] [座長抄録] 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

*金澤 学¹、*玉置 勝司² (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野、2. 神奈川歯科大学 歯学部)

[SY9-1] 保険収載の経緯とその詳細について

*小島 規永¹ (1. 愛知学院大学 総合歯科臨床教育研修センター)

[SY9-2] 3次元プリント有床義歯の臨床的エビデンス

*新保 秀仁¹ (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座)

[SY9-3] 3次元プリント有床義歯の臨床ステップ（印象・咬合採得・試適）

*岩城 麻衣子¹ (1. 東京科学大学 口腔デジタルプロセス学分野)

[SY9-4] 3次元プリント有床義歯の製作ステップ（技工作業と修理・メンテナンス）

*竜 正大¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 9:00 ~ 10:20 | 会場 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

共催：日本磁気歯科学会

磁性アタッチメントは1992年に有床義歯の支台装置として開発・臨床応用され、2021年には歯科保険診療に収載された。磁力という特性を生かし、超高齢社会に寄与する有用性と魅力を備えた可撤性支台装置である。本シンポジウムでは、日本磁気歯科学会が実施する予後調査と臨床から見える現状、新たな磁性アタッチメントの開発動向と最新知見、そして将来展望について講演いただく。

[SY1-座長] [座長抄録] 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望*武部 純¹、*田中 譲治² (1. 愛知学院大学歯学部有床義歯学講座、2. 東関東支部)**[SY1-1] 保険診療で磁性アタッチメントを使用する理由とは何か***永田 和裕¹ (1. 関越支部)**[SY1-2] 歯科用磁性アタッチメントの構造とニッケルフリー化の試み***高橋 正敏¹ (1. 北海道医療大学)**[SY1-3] 超薄型磁性アタッチメントの可能性***石田 雄一¹ (1. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00～10:20 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

共催：日本磁気歯科学会

[SY1-座長] [座長抄録] 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

*武部 純¹、*田中 譲治² (1. 愛知学院大学歯学部有床義歯学講座、2. 東関東支部)

キーワード：磁性アタッチメント、予後調査、最新知見と将来展望

磁性アタッチメントは1992年に有床義歯の支台装置として開発・臨床応用され、日本磁気歯科学会臨床評価委員会では、共通プロトコルに基づく多施設臨床評価を通じて長期経過データを蓄積してきた。診療ガイドラインの策定、ISO取得、エビデンスの蓄積により、磁力という特性を生かし超高齢社会に寄与する有用性と魅力を備えた可撤性支台装置として評価され、2021年9月にはC2区分（新機能・新技術）として保険収載された。同年からは保険診療を含めた多施設長期予後調査研究が開始され、現在継続している。

本シンポジウムでは、保険収載から2026年で5年を迎えることを機に、磁性アタッチメントの臨床的意義と将来展望を共有し、臨床現場での適正な理解のもとでの普及を図るべく、日本磁気歯科学会より3名のエキスパートにご登壇いただく。永田和裕先生には、保険適用となった磁性アタッチメント義歯に求められる適用症例の選択と義歯設計、長期予後調査と臨床データから見える現状について解説いただく。高橋正敏先生には、磁性アタッチメントの仕組み・構造・特性、研究データに基づくニッケルフリー磁石構造体の開発動向と臨床導入について解説いただく。石田雄一先生には、超薄型磁性アタッチメントを適用した可撤性補綴装置について、構造・製作方法・性能に関する最新知見と将来展望を解説いただく。

本シンポジウムが、磁性アタッチメント治療の理解をさらに深め、今後の補綴歯科臨床に有益な知見を共有する機会となることを期待する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00 ~ 10:20 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

共催：日本磁気歯科学会

[SY1-1] 保険診療で磁性アタッチメントを使用する理由とは何か

*永田 和裕¹ (1. 関越支部)

キーワード：磁性アタッチメント、保険診療、多施設予後調査

部分床義歯の目的は、残存歯を含めた周囲組織の保護とともに、審美性・咀嚼・構音などの口腔機能の回復にある。これらの観点から磁性アタッチメントの適用を考えると、支台歯に対する緩圧効果とクラスプが露出しない審美性が、従来の主な選択基準であったと考えられる。しかし、高い機能回復ではインプラント治療が、また審美性ではノンメタルクラスプデンチャーが一般化したことで、磁性アタッチメントを選択する必然性は、以前より薄れてきた感がある。このような現状において、改めて磁性アタッチメントの歯科補綴学的な意義を考えると、高齢化に伴う全身状態の変化への対応や、支台歯が喪失した際に容易に対応可能であるという利便性こそが、本装置を選択する重要なポイントと考えられる。本シンポジウムでは、このようなコンセプトに基づき、保険診療の磁性アタッチメント義歯に求められる適用症の選択とともに、支台歯の保護も含めた可逆的かつ発展的な設計について解説したい。また、2021年に磁性アタッチメント義歯が保険診療へ導入され、それまで自費診療として使用されていた磁性アタッチメントの使用状況が大きく変化している。日本磁気歯科学会臨床評価委員会では、このような状況を踏まえて、2021年より保険診療も含めた磁性アタッチメントの多施設長期予後調査を実施している。2025年度までに登録された161症例、302支台について、予後調査のドロップアウト率や、支台歯の喪失などの重大有害事象の発生率を報告するとともに、障害発生状況およびその対応について、実際の症例を提示したい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00 ~ 10:20 | 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

共催：日本磁気歯科学会

[SY1-2] 歯科用磁性アタッチメントの構造とニッケルフリー化の試み

*高橋 正敏¹ (1. 北海道医療大学)

キーワード：歯科用磁性アタッチメント、磁気回路、ニッケルフリー

歯科用磁性アタッチメントは、磁力という目には見えない力を利用して義歯の維持と安定を図るユニークな支台装置である。国産の磁性アタッチメントは単なる永久磁石ではなく、磁気回路を備えた磁石構造体を用いる点に特徴がある。磁石構造体は磁性ステンレス鋼（ヨーク）と非磁性ステンレス鋼を組み合わせ、キーパーとの間に閉磁路型の磁気回路を形成することで局所的に磁束密度を高め、大きな維持力を発揮する。そのため、小型でありながら極めて大きな維持力を有し、かつ、漏洩磁場が非常に少ないという優れた特性を示す。

これらの特性から臨床医が理解しておくべき点は、磁石構造体を義歯に組み込む際にはキーパーとの位置関係を正確に確保する必要があるということである。漏洩磁場が小さいため、磁石構造体とキーパーとの間の隙間（エアギャップ）は維持力を大きく低下させる。また、両者が密着していても吸着面に水平的なずれが生じると磁気回路が乱れ、同様に維持力が低下する。さらに、キーパーが磁石構造体より小さい場合にも、本来の維持力を発揮できない。これら現象について、実験データを示しながら解説する。

一方、磁石構造体に用いられる非磁性ステンレス鋼には微量のニッケルが含まれている。磁性アタッチメントに起因する金属アレルギーの報告は見当たらないものの、ISOやJISでニッケルは有害元素と位置付けられており、ニッケルを含まない磁性アタッチメントの開発が望まれている。演者らはニッケルフリー磁石構造体の開発に成功しており、その研究成果についても紹介する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00 ~ 10:20 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム1 保険収載された磁性アタッチメントの現在地と未来への展望

座長：武部 純（愛院大）、田中 譲治（東関東支部）

共催：日本磁気歯科学会

[SY1-3] 超薄型磁性アタッチメントの可能性

*石田 雄一¹ (1. 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔顎顔面補綴学分野)

キーワード：磁性アタッチメント、超薄型、Magnetic Removable Bridge

磁性アタッチメント（MA）は、優れた機能性、高い自浄性、支台歯への負担軽減などの特徴を有する一方で、MAには約2mmの厚みがあり、義歯の破折、支台歯切削量の増加、補綴空隙に起因する適応範囲の制限といった問題を引き起こす可能性がある。 マグネデザイン株式会社によって開発されたMagteeth[®]は、磁石構造体の構造・製造方法を改良することで、従来製品と同等性能を維持しながら10分の1以下のコストでの製造が可能になった。さらに極めて薄い部品を用いることにより、厚さ約1mmの超薄型MAの開発に成功しており、従来のMAの厚みに起因する様々な問題の解決が期待されている。 MAとテレスコープ義歯を組み合わせたMagnetic telescopic crown denture（MT冠義歯）は、以前より臨床応用されている。MT冠義歯は、異物感の軽減、優れた咀嚼能力、安定した維持力を有しているが、製作工程が複雑であること、高い製作コストを要すること、ならびに十分な補綴空隙を必要とするなどの欠点もあった。しかし、超薄型MAとCAD/CAM技術を組み合わせて使用することにより、これらの制約を克服できる可能性がある。我々は超薄型MAとMT冠義歯の概念を取り入れ、ブリッジに近い形態を有する新たなタイプの義歯（Magnetic Removable Bridge）の製作を試みた。本発表では、Magteeth[®]の紹介と、Magnetic Removable Bridgeの構造、製作方法ならびに性能について紹介する。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 9:00～10:20 | Ⅲ 第3会場（ウイंकあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

共催：一般社団法人 日本栄養治療学会

超高齢社会において、口腔機能の回復を基盤とした「食べる力」と栄養の重要性が高まり、補綴歯科治療と栄養治療の両軸による栄養状態の向上への寄与が期待される。本シンポジウムでは、歯科治療と栄養治療との関係を整理し、演者それぞれの取り組みの現状と課題、今後の学会間協働の可能性について多角的に検討する。

[SY6-座長] [座長抄録] 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

*隅田 由香¹、光永 幸代² (1. 日本歯科大学生命歯学部 歯科補綴学第1講座、2. 横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学)

[SY6-1] 歯科外来における口腔機能管理を通じた栄養への取り組み

*上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

[SY6-2] ライフステージに応じた栄養課題と咀嚼機能の役割

*池邊 一典¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

[SY6-3] 「口から「食べる」と栄養治療の連携戦略」

*石井 良昌¹ (1. 日本大学松戸歯学部 口腔外科学講座)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00～10:20 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

共催：一般社団法人 日本栄養治療学会

[SY6-座長] [座長抄録] 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

*隅田 由香¹、光永 幸代² (1. 日本歯科大学生命歯学部 歯科補綴学第1講座、2. 横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学)

キーワード：1.補綴歯科治療と栄養治療の連携、2.口腔機能管理と栄養、3.超高齢社会における学会間協働

超高齢社会を迎えた現在、口腔機能の回復を基盤とした「食べる力」の再構築と、それを支える栄養摂取およびリハビリテーションの重要性は、医療・介護の現場においてますます高まっている。補綴歯科治療および栄養治療を用いて、栄養状態の向上に寄与することが期待される。本シンポジウムは、日本補綴歯科学会と日本栄養治療学会の共催のもと、歯科治療と栄養治療との関係を整理し、今後の学会間連携の可能性を考えることを目的として企画された。臨床および研究において豊富な経験を有する専門家より、それぞれの立場からお話を頂く。具体的には、「口から食べる」ことを軸とした栄養治療との連携戦略、歯科外来における口腔機能管理を通じた栄養への取り組みのご紹介、口腔機能管理による栄養摂取を通じた、介護予防、重症化予防の観点の説明、さらに大規模研究の視点から得られる知見を掲示していただく。連携協定締結後間もない現段階においては、それぞれの専門性と課題を整理し、補綴治療と栄養治療との接点を明確にすることが重要である。本シンポジウムが、両学会の相互理解を深め、今後の実践的・学術的連携へと発展するための基盤となることを期待したい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00 ~ 10:20 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

共催：一般社団法人 日本栄養治療学会

[SY6-1] 歯科外来における口腔機能管理を通じた栄養への取り組み

*上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

キーワード：オーラルフレイル、口腔機能低下症、口腔機能管理と栄養

補綴歯科治療の対象患者は、単に歯列に欠損があるだけではなく、オーラルフレイルや口腔機能低下症を併存する場合が多い。口腔機能低下症の罹患率は、地域在住高齢者での調査結果より歯科外来での調査結果の方が高いことがわかっている。これは、歯科通院中の患者の方が口腔機能の脆弱性が高いことを示唆している。口腔機能の低下は、食事内容の偏りや食事の摂取量低下を招き、低栄養やフレイルのリスクを高め得る。したがって、歯科外来では、補綴治療を含む歯科治療に加えて口腔機能低下症の評価と管理を行う必要がある。客観的な評価である口腔機能検査を行い、口腔機能低下症と診断された場合には、口腔機能管理を行う。口腔機能低下症は、口腔関連筋のトレーニングを含むが、それだけでは十分ではない。栄養評価・栄養指導を口腔機能管理のプロセスに組み込むことで、食べる機能と食事行動の両面から介入できる。

本講演では、口腔機能低下症患者に対する栄養状態のスクリーニング、食事の多様性・摂取状況・体重変化等を踏まえた簡便な栄養指導の実際を紹介する。加えて、それらを裏付けるエビデンスを紹介する。我々の研究では、口腔機能管理に栄養指導・食事指導を加えることで、栄養状態の改善や骨格筋量の向上などの成果を示している。歯科外来から始める「評価→管理→再評価」のサイクルを共有し、多職種連携を通じた地域の栄養支援につなぐ方略を議論したい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00～10:20 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 一連携と将来展望一

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

共催：一般社団法人 日本栄養治療学会

[SY6-2] ライフステージに応じた栄養課題と咀嚼機能の役割

*池邊 一典¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

キーワード：ライフステージと栄養課題、咀嚼機能と栄養摂取、歯科補綴治療と介護予防

栄養管理の課題はライフステージによって大きく異なる。中年期から前期高齢期（～65歳）では過栄養が主要課題であり、肥満を基盤とした糖尿病，メタボリックシンドローム，脂質異常症など生活習慣病への対応が求められる。一方，後期高齢期（75歳以降）では低栄養やフレイルが中心の問題となり，体重減少や低BMIへの対策が重要となる。65～75歳はその移行期に位置し，肥満対策から低栄養対策へと視点を転換する“ギアチェンジ”を，個々の状態に応じて判断すべき重要な時期である。有病期の栄養管理も，エネルギー・タンパク質の充足が中心となる。

咀嚼機能の低下は，肥満および低体重の双方に関連し得る。本シンポジウムでは，我々の学際的大規模縦断研究の成果を基に，学童期における咀嚼と肥満の関連，高齢期における咬合状態と栄養摂取，動脈硬化，低体重，さらに身体機能・認知機能との関連を提示する。これらの知見は，咀嚼機能の維持が生活習慣病の重度化予防および介護予防に寄与することを示している。歯の欠損によって失われた咀嚼機能のみならず食欲や社会性を回復させる補綴歯科治療の意義は大きい。

私は，科学的根拠の集積はすでに十分であると考えている。今求められるのは，蓄積された科学的根拠の社会実装と国民への適切な情報発信である。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 9:00～10:20 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム6 補綴治療と栄養治療による栄養改善 ー連携と将来展望ー

座長：隅田 由香（日歯大）、光永 幸代（横浜市立大）

共催：一般社団法人 日本栄養治療学会

[SY6-3] 「口から「食べる」と栄養治療の連携戦略」

*石井 良昌¹ (1. 日本大学松戸歯学部 口腔外科学講座)

キーワード：歯科と栄養、食べる、学会連携

超高齢社会において「口から食べる」ことは、単なる栄養摂取手段ではなく、生命予後、身体機能、QOLを規定する中核的医療課題である。補綴歯科治療は咀嚼機能の回復を通じて経口摂取を支えるが、形態回復のみでは十分ではなく、嚥下機能、全身状態、炎症・代謝動態を踏まえた包括的評価が不可欠である。一方、栄養治療はエネルギー・蛋白質投与設計に加え、サルコペニア、フレイル、オーラルフレイルの視点を統合する段階へ進化している。本シンポジウムでは、①咀嚼・嚥下機能評価と栄養アセスメント（GLIM基準、身体組成、炎症指標）の統合、②補綴介入前後における栄養状態および筋量変化のエビデンス、③NST・FLS・在宅医療における歯科の役割を提示する。さらにICTを活用した多職種連携モデルを示し、「機能回復→経口摂取改善→栄養状態向上→生活機能維持」という好循環を構築する戦略を提案する。本講演では、「補綴歯科と栄養治療の融合は、医科歯科連携の深化と健康寿命延伸に直結する実践モデル」であることを概説したい。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

現在、メタルフリーブリッジとしては高強度硬質レジンブリッジが保険収載されているものの、適応症例が限られており、加えて技工作業も煩雑であるため、広く普及するには至っていない。本シンポジウムでは、「コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの具備すべき機械的性質要件に関する基本的な考え方」の解説に加え、代表的なCAD/CAMブリッジを紹介していただき、本技術の臨床的価値と今後の展望を明確にした上で、保険収載に向けた本学会としての今後の対応について議論を深めたい。

[SY2-座長] [座長抄録] CAD/CAMブリッジの現状と展望

*會田 英紀¹、*柏木 宏介² (1. 北海道医療大学クラウンブリッジ・インプラント補綴学分野、2. 大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座)

[SY2-1] コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの基本的な考え方

*新谷 明一¹ (1. 日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座)

[SY2-2] CAD/CAMブリッジの医療保険への導入の期待

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

[SY2-3] ハイブリッドレジンブロックによるCAD/CAMブリッジの臨床的有効性

*疋田 一洋¹ (1. 北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系デジタル歯科医学分野)

[SY2-4] 二層構造を有するCAD/CAMブリッジの臨床的意義

*小川 匠¹ (1. 鶴見大学歯学部クラウンブリッジ補綴学講座)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30～11:50 | 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

[SY2-座長] [座長抄録] CAD/CAMブリッジの現状と展望

*會田 英紀¹、*柏木 宏介² (1. 北海道医療大学クラウンブリッジ・インプラント補綴学分野、2. 大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座)

キーワード：CAD/CAMブリッジ、診療指針、保険収載

現在、補綴治療に対する審美的要求の高まりに加え、金銀パラジウム合金の市場価格高騰を背景として、保険診療においてもメタルフリー治療への需要は増大している。単冠症例ではCAD/CAM冠の適応拡大が段階的に進み、多くの症例において保険診療下でのメタルフリー補綴が可能となった。一方、少数歯欠損に対するブリッジ治療においては、高強度硬質レジンブリッジが保険収載されているものの、適応症例が限定的であることに加え、技工作業の煩雑さも相まって、臨床現場における十分な普及には至っていないのが現状である。このような背景を踏まえ、医療問題検討委員会では、令和8年度診療報酬改定におけるCAD/CAM法による臼歯部ブリッジの保険収載を目指し、医療技術評価提案書の作成・提出を行うとともに、診療指針の策定にも取り組んできた。しかしながら、本抄録執筆時点では、同改定での保険収載は困難な状況にある。

本シンポジウムでは、まず新谷明一先生 (日歯大) に「コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの具備すべき機械的性質要件に関する基本的な考え方」について、材料学的観点から解説していただく。続いて、末瀬一彦先生 (関西支部)、疋田一洋先生 (北医療大)、小川匠先生 (鶴見大) にそれぞれが取り組んでいる代表的なCAD/CAMブリッジの紹介をしていただく。さらに総合討論を通じて、本技術の臨床的価値と今後の展望を明確にした上で、保険収載および適応拡大に向けた本学会としての今後の対応について議論を深めたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

[SY2-1] コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの基本的な考え方

*新谷 明一¹ (1. 日本歯科大学生命歯学部歯科理工学講座)

キーワード：CAD/CAMブリッジ、ファイバー補強、レジンプロック

近年、歯科用貴金属材料に依存しない補綴治療の普及を目的として、高強度硬質（コンポジット）レジンプリッジに続き、臼歯部中間欠損に対応する3ユニットCAD/CAMブリッジの開発が進んでいる。コンポジットレジンの主材料とする本補綴装置は、材料特性として脆性的破壊を示すため、臨床応用には十分な機械的強度と安全性の確保が不可欠である。本講演では、令和7（2025）年10月3日に日本歯科理工学会と日本補綴歯科学会から公表された「コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの具備すべき機械的性質要件に関する基本的な考え方」に倣い、一体構造および二層構造（ファイバーフレーム併用型）など複数の製作方法における構造的特徴を整理し、機械的性質や破壊様式に及ぼす影響について概説する。また、基礎研究からの提案として、曲げ試験により得られる材料物性評価に加え、臨床形態を反映したブリッジ形状での強度評価の重要性を提示し、単純な形態を有する棒状試験片を用いたデータのみでは補綴装置としての有用性を十分に議論できない可能性について考察する。特に補強材料の有無や材料の弾性挙動は、破壊様式や支台装置への負荷伝達に大きく関与し、補強材料が破壊の制御に寄与し得る可能性について紹介したい。設計指針と材料要件の統合的理解を深めることで、コンポジットレジンを用いた3ユニットCAD/CAMブリッジの安全な臨床応用に向けた基礎知識としたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

| [SY2-2] CAD/CAMブリッジの医療保険への導入の期待

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

キーワード：ブリッジ、医療保険、ファイバー内包型ハイブリッド型コンポジットレジン

医療保険においてブリッジによる欠損修復方法では、強度的な課題を解決するために多くの症例では金属材料が用いられてきた。しかし、金属修復は審美不良、複雑な操作性、支台歯や歯肉の変色、金属アレルギーに加えて最近では貴金属の急激な高騰が課題とされている。最近、ブリッジ対応のグラスファイバー内包型ハイブリッド型コンポジットレジンが開発され、金属製ブリッジに代わるマテリアルとして医療保険への導入が期待されている。歯科用CAD/CAMシステムを用いることにより、設計・加工製作がコンピュータ支援によって行われ、品質のばらつきを抑えることができる普遍性がある。多くの金属量を必要とするブリッジは医療費にも直接影響を受けることから、今後さらに高騰が予想される保険診療用合金を使用しないメタルフリー修復は期待され、本材料を用いたブリッジは価格変動もなく、安定的供給が可能な修復装置である。一方、耐久性については2014年に医療保険に導入されたCAD/CAM冠ですでに実績もあるが、ブリッジとしては更なる強度が必要である。これまでメタルフリー修復のブリッジとして適用されてきた材料と比較しても明らかに破壊強さが向上している。グラスファイバーが内包されているため、対合歯とのクリアランスは2mm以上必要となることから原則的には失活歯支台歯が適応となる。2年以上の臨床実績においても脱離以外には特に問題はない。また、突発的に連結部での破折が生じて、ファイバーが内包されているためにコンポジットレジンが飛散することもなく、口腔内で安全に使用できる。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

[SY2-3] ハイブリッドレジンブロックによるCAD/CAMブリッジの臨床的有効性

* 足田 一洋¹ (1. 北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系デジタル歯科医学分野)

キーワード：CAD/CAM、ブリッジ、ハイブリッドレジンブロック

昨今の著しい貴金属価格高騰および患者の審美的要求の高まりを背景として、本邦の保険診療における単冠修復では、金銀パラジウム合金による全部鑄造金属冠から、ハイブリッドレジンブロックを用いたCAD/CAM冠への移行が進み、現在では標準的な治療選択肢として定着するに至っている。一方で、ブリッジに対しても非金属材料の応用が強く期待されており、2018年には高強度硬質レジンブリッジが保険収載された。しかしながら、適応症例の限定や技工操作の煩雑さ、加えて使用材料の物性や長期的な耐久性に対する懸念などから、臨床現場において十分な普及には至っていないのが現状である。そこで本講演では、ハイブリッドレジンブロックを用いたCAD/CAMブリッジについて、その臨床的有効性を検討する。均質で安定した物性を有するハイブリッドレジンブロックの有効性は、CAD/CAM冠での多数の基礎的・臨床的研究によって、すでに実証済みである。また、支台歯形成や接着操作等の臨床術式や技工作業でも多くのノウハウが蓄積されており、これらをブリッジへ適用することは極めて有用であると考えられる。このような材料特性を踏まえた支台歯形成と十分なコネクタ断面積の確保、そして確実な接着操作に配慮しつつ臨床応用を行い、装着後の経過観察から口腔内での耐久性、有効性を評価した。これらの臨床応用を通して得られた知見から、適応症の考え方や設計上の留意点を示し、将来的な診療指針の整理および新たな保険収載に向けた課題と展望について考察する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第1会場 (ウイנקあいち 2F 大ホール)

シンポジウム2 (医療問題検討委員会) CAD/CAMブリッジの現状と展望

座長：會田 英紀 (北医療大)、柏木 宏介 (大歯大)

[SY2-4] 二層構造を有するCAD/CAMブリッジの臨床的意義

*小川 匠¹ (1. 鶴見大学歯学部クラウンブリッジ補綴学講座)

キーワード：ブリッジガラスファイバー強化型レジン、キャドオン型CAD/CAM、築盛型CAD/CAMブリッジ

CAD/CAM技術の進展により、コンポジットレジンを用いたCAD/CAMブリッジは、金属材料に依存しない固定性補綴装置として臨床応用が拡大しつつあります。とくに保険診療における適応拡大を背景として、材料特性や製作プロセスの異なる多様なCAD/CAMブリッジが臨床現場に導入されています。一方で、CAD/CAMブリッジについては、材料特性や構造設計との関係を含め、臨床的な実績や知見の共有が十分とは言えず、その位置づけは必ずしも明確ではありません。このような状況を踏まえると、CAD/CAMブリッジを構造および製法の違いに基づいて整理し、その臨床的意味を再検討することが重要と考えられます。CAD/CAMブリッジは、一体型構造に加え、フレームと前装部を別工程で構築する二層構造に分類されます。二層構造には、キャドオン型および築盛型が含まれます。これらの構造の違いは、機械的性質や破壊様式、さらには臨床上のトラブル発現様式に影響を及ぼす可能性があり、単一の評価軸による一括した議論には限界があります。本シンポジウムでは、CAD/CAMブリッジの基本的な構造分類と設計概念を概説したうえで、二層構造を有するCAD/CAMブリッジを中心に臨床的観点から考察します。本シンポジウムが、補綴歯科臨床におけるCAD/CAMブリッジの理解を深め、今後の症例選択および設計判断に役立つ一助となることを期待しています。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | Ⅲ 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

インプラント治療が広く普及した現在、天然歯とインプラント体が同一口腔内に混在する患者は確実に増加している。インプラント治療後に欠損範囲がさらに拡大した場合には、再治療計画の立案や実行に難渋することもあり。また、入念な経過観察を行っていても、咬合の不調和や新たな欠損の発生は避けられないことも少なくない。本シンポジウムでは、混在によって生じる臨床的事象を整理し、咬合の経時的変化、可撤性補綴装置を含む補綴設計、ならびに終末歯列を見据えた欠損拡大を防ぐための戦略、そして発生時に選択し得る対応オプションについて多角的に議論する機会としたい。

[SY7-座長] [座長抄録] 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

*小山 重人¹、*梅原 一浩² (1. 東北大学病院・顎顔面口腔再建治療部、2. 東北・北海道支部)

[SY7-1] 天然歯とインプラント体の混在歯列における咬合の変化を考察する

*神野 洋平¹ (1. 九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野)

[SY7-2] 天然歯とインプラント体に維持を求めたRPD～ICRPDを考察する

*中居 伸行¹ (1. 長崎大学/関西支部)

[SY7-3] 天然歯喪失から終末歯列に至るインプラント補綴移行戦略を考察する

*向坊 太郎¹ (1. 九州歯科大学口腔再建補綴学分野)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

[SY7-座長] [座長抄録] 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

*小山 重人¹、*梅原 一浩² (1. 東北大学病院・顎顔面口腔再建治療部、2. 東北・北海道支部)

キーワード：歯科インプラント、混在歯列、咬合変化

インプラント治療が広く普及した現在，天然歯とインプラント体が同一口腔内に混在する患者は確実に増加している．インプラント治療後に欠損範囲がさらに拡大した場合には，再治療計画の立案や実行に難渋することも多い．また，入念な経過観察を行っていても，咬合の不調和や新たな欠損の発生は避けられないことも少なくない．本シンポジウムでは，混在によって生じる臨床的事象を整理し，咬合の経時的変化，可撤性補綴装置を含む補綴設計，ならびに終末歯列を見据えた欠損拡大を防ぐための戦略，そして発生時に選択し得る対応オプションについて多角的に議論する機会としたい．

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

| [SY7-1] 天然歯とインプラント体の混在歯列における咬合の変化を考察する

*神野 洋平¹ (1. 九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野)

キーワード：混在歯列、咬合支持、咬合変化

同一口腔内に天然歯とインプラント体が混在する歯列は、補綴臨床において日常的に遭遇する状況である。欠損進行に伴う咬合支持の喪失は、咬合の不安定化や咬合崩壊を引き起こす主要な要因であり、臼歯部支持の回復は補綴治療における重要な目標である。インプラント治療は、咬合支持回復のための有効な治療手段として広く普及しており、咬合の安定化や欠損部隣接歯への負担軽減、さらには残存歯の長期的な保護に寄与することが報告されてきた。

一方で、天然歯とインプラント体は、歯根膜の有無に起因する支持様式、変位特性、感覚フィードバック機構が本質的に異なることは古くから議論されてきた。これらの差異を考慮して補綴装置装着時に付与された咬合関係が、天然歯とインプラント体が混在する歯列において、長期にわたり不変であるとは限らない。臨床現場では、咬合接触様式の変化や咬合力負担部位の変化といった時間依存的変化が観察されることも少なくない。

本講演では、咬合支持回復という観点からインプラント治療の意義を整理したうえで、天然歯とインプラント体が混在する歯列において生じ得る咬合の変化を、力学的、生物学的、ならびに時間的側面から考察する。特定の理想的咬合様式を提示することを目的とするのではなく、混在歯列における咬合を静的な結果ではなく、経時的に変化し管理を要する動的な過程として捉える視点を提示し、本シンポジウムにおける後続の議論の基盤とすることを目的とする。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

[SY7-2] 天然歯とインプラント体に維持を求めたRPD～ICRPDを考察する

*中居 伸行¹ (1. 長崎大学/関西支部)

キーワード：天然歯、インプラント、RPD

補綴治療において、遊離端欠損あるいは多数歯欠損に対する治療オプションとしては、一般的には、従来型可撤性部分床義歯(RPD)、固定性インプラント義歯(FIP)が利用される。しかしながら、FIPは経済的、解剖学的制約から現実的には必ずしも全ての患者に適用できないという現実直面する、また、たとえRPDを選択した場合でも、RPDは患者に受け入れられないことが多く、主観的客観的短所も有する。

他方、RPDの床下にオーバーレイデンチャーとしてインプラントを配置して、天然歯とインプラントが共存するいわゆるIARPDの在り方が現在、種々の角度から検討されている。

さらにその一方、口腔内にインプラントが既存している場合、補綴処置の一法としてImplant-crown-retained RPD (ICRPD)と呼ばれているインプラント上部構造(non-surveyed crown)にクラスプがかかった従来型RPDを作成することは従来から経験的に行われている。しかしながら、戦略的に鉤歯(surveyed crown)のポジションを求め、そこにインプラントを設置するという考え方はまだ多くは議論されていない。

本講演ではしばしば補綴治療で難渋する欠損について、surveyed crown によるICRPDも含めた種々の処置法による症例を供覧し、検討する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 10:30 ~ 11:50 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム7 同一口腔内における天然歯とインプラント体の混在を考察する

座長：小山 重人（東北大）、梅原 一浩（東北・北海道支部）

| [SY7-3] 天然歯喪失から終末歯列に至るインプラント補綴移行戦略を考察する

*向坊 太郎¹ (1. 九州歯科大学口腔再建補綴学分野)

キーワード：終末歯列、既存インプラント、インプラント補綴移行

インプラント治療は欠損補綴の一手段として成熟期を迎え、多くの患者が固定性補綴装置による口腔機能の向上という恩恵を受けてきた。しかし、同時に天然歯残存数の増加や平均寿命の延伸に伴い、天然歯とインプラントが同一口腔内に長期間共存する症例が増加している。このような混在歯列においては、歯根膜の有無に起因する支持様式や変位特性の違いから、経年的な咬合変化や隣在歯の喪失といった問題が顕在化しつつある。欠損が拡大し少数歯残存あるいは無歯顎に近い終末歯列へと移行する過程では、残存歯の保存か抜歯か、固定性補綴装置か可撤性補綴装置かといった複合的な判断が求められる。この際、患者のライフステージや全身状態、経済的制約、セルフケア能力を考慮した段階的な補綴計画が重要となる。また、過去に埋入された既存インプラントをいかに活用するかという視点も重要となる。インプラント体の形状や接合様式は時代とともに変遷しており、既存インプラントと新規インプラントの共存、あるいはインプラントオーバーデンチャーへの移行など、多様な選択肢を検討する必要がある。本講演では、天然歯喪失から終末歯列に至る過程において、既存インプラントの活用を含めた補綴移行戦略について症例を供覧しながら考察する。力学的観点からの咬合再構成に加え、将来の欠損拡大を見据えた埋入計画や段階的な補綴様式の変更についても検討し、本シンポジウムにおける議論の総括としたい。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 会場 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム3 ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

座長：伊藤 誠康（日大松戸）、大山 哲生（日本大）

ノンメタルクラスプデンチャーは、日本補綴歯科学会にて2013年にポジションペーパーが発表され学術的な裏付けをもって本格的に臨床応用が開始されました。その後2018年第127回学術大会および2022年補綴歯科専門医研修会でも継続して取り上げられた補綴歯科として必ず習得しておくべき知識と技術となりつつあります。前回から4年を経過しまして今回は本大会にてノンメタルクラスプデンチャーの現在地を分かち合いたいと考え、本企画を立案いたしました。

[SY3-座長] [座長抄録] ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

伊藤 誠康¹、*大山 哲生² (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座、2. 日本大学歯学部歯科補綴学第II講座)

[SY3-1] ノンメタルクラスプデンチャーの臨床の勘所と展望

*谷田部 優¹ (1. 東京支部)

[SY3-2] ノンメタルクラスプデンチャーの材料と製作法

*濱中 一平¹ (1. 福岡歯科大学 咬合修復学講座 有床義歯学分野)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

シンポジウム3 ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

座長：伊藤 誠康（日大松戸）、大山 哲生（日本大）

[SY3-座長] [座長抄録] ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

伊藤 誠康¹、*大山 哲生² (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座、2. 日本大学歯学部歯科補綴学第II講座)

キーワード：ノンメタルクラスプデンチャー、熱可塑性樹脂、高分子材料

ノンメタルクラスプデンチャーは、日本補綴歯科学会において2013年にポジションペーパーが発表され学術的な裏付けをもって本格的に臨床応用が開始されました。その後2018年第127回学術大会および2022年補綴歯科専門医研修会でも継続して取り上げられた補綴歯科として必ず習得しておくべき知識と技術となりつつあります。しかし、未だノンメタルクラスプデンチャーに起因すると考えられる咀嚼困難症例を多くみかけます。そこで、前回から4年を経過しまして今回は本大会にて広くノンメタルクラスプデンチャーについて考える機会が必要と考えました。谷田部 優先生は、ノンメタルクラスプデンチャーを学術的見地に則り、広く臨床応用されてこられた臨床家のトップランナーです。本シンポジウムでは、長年臨床応用されてきたからこそわかる熱可塑性樹脂の特性を活かせる症例の選び方をはじめ、設計や材料選択の勘所のみならず、術後対応に至るまでご講演いただきます。濱中一平先生は、アカデミアの観点から、ノンメタルクラスプデンチャーに応用されている材料の種類および物性そして、常温重合レジンとの接着特性等について研究結果を踏まえて解説していただきます。さらに近年その発展の目覚ましいデジタル技術のノンメタルクラスプデンチャーへの活用についてもご講演いただく予定です。本シンポジウムは、ノンメタルクラスプデンチャーの現在地をより深く、そして正しく理解するとともに、成熟期に入ったと考えられている技術の新たな展望をもお示し出来ると期待しております。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム3 ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

座長：伊藤 誠康（日大松戸）、大山 哲生（日本大）

[SY3-1] ノンメタルクラスプデンチャーの臨床の勘所と展望

*谷田部 優¹ (1. 東京支部)

キーワード：ノンメタルクラスプデンチャー、熱可塑性樹脂、部分床義歯の設計

フレキシブルな樹脂を用いたノンメタルクラスプデンチャー（以下NMCD）は、2013年に笛木・大久保らにより示された『熱可塑性樹脂を用いた部分床義歯（ノンメタルクラスプデンチャー）の臨床応用』を一つの指針として、現在も部分床義歯の選択肢として臨床に定着している。NMCDは、アタッチメント義歯やミリング義歯、テレスコープ義歯のような大きな前処置を必要とせず、審美的要求に対応可能な補綴装置として一定の臨床的需要がある。一方で、材料特性や設計自由度の違いから、適応や設計には十分な理解が求められる。

NMCDに関する臨床応用については、日本補綴歯科学会において委員会セミナー（2012年）をはじめ、臨床リレーセッション（2018年）、専門医研修会（2022年）などで継続的に取り上げられ、その適応や臨床的留意点について議論が重ねられてきた。

NMCDの基本的な設計概念は従来の部分床義歯の設計原則に準じるものの、金属クラスプとは異なる材料特性を有するため、維持様式や支持の考え方、設計上の許容範囲について十分な理解が不可欠である。適応を誤った場合には、破損や維持不良、支台歯への為害作用を招く可能性も指摘されている。演者は2006年よりNMCDの臨床を始めたが、多くの材料研究および臨床報告を通じて、樹脂特性、設計の勘所、術後のメンテナンス対応について知見を重ねてきた。本講演では、従来型クラスプデンチャーとの相違点を踏まえ、症例選択、材料選択、設計上の注意点、術後対応ならびに今後の臨床的展望について考察する。なお、症例報告に関しては患者の同意を得ている。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

シンポジウム3 ノンメタルクラスプデンチャーの現在地：臨床と基礎研究が示す新たな展望

座長：伊藤 誠康（日大松戸）、大山 哲生（日本大）

| [SY3-2] ノンメタルクラスプデンチャーの材料と製作法

*濱中 一平¹ (1. 福岡歯科大学 咬合修復学講座 有床義歯学分野)

キーワード：ノンメタルクラスプデンチャー、高分子材料、CAD/CAM

1950年代より米国では、ポリアミド系樹脂を用いた部分床義歯が使用されてきた。日本においては2007年以降、弾性を有する義歯床用熱可塑性樹脂が薬事承認を受けたことにより、ノンメタルクラスプデンチャーが広く臨床応用されるようになった。しかし、導入当初は、使用材料に関する基礎的報告が少なく、十分な科学的根拠が確立されないまま、主として審美性の回復を目的に臨床応用される例もみられた。その結果、顎堤の異常吸収や支台歯の移動・脱落、さらには修理困難な材料の存在など、長期予後に関わる問題が指摘されるようになった。その後、常温重合型レジンと接着可能な熱可塑性樹脂や専用プライマー、適切な表面処理方法が報告され、材料選択や設計に関する理解は徐々に深まってきた。また、公益社団法人日本補綴歯科学会においても、ポジションペーパー（Ann Jpn Prosthodont Soc 5：387-408, 2013）やシンポジウムを通じて、材料特性、設計概念、臨床的留意点および予後に関する知見が広く共有されてきた。本学会においてノンメタルクラスプデンチャーが大きく取り上げられたのは、2022年の補綴歯科専門医研修会が最後であり、今回は4年ぶりの機会となる。そこで本シンポジウムでは、ノンメタルクラスプデンチャーに使用される材料の種類および物性、常温重合型レジンとの接着特性について概説するとともに、これまでに報告され臨床に生かされてきた知見を整理し、さらに従来法による製作法に加え、近年発展の著しいデジタル技術を応用した製作法についても解説する。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | Ⅲ 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム8 (研究企画推進委員会) リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

座長：笛木 賢治 (科学大)

近年、病院の診療記録やレセプト情報、ナショナルデータベースなどに代表されるリアルワールドデータ (RWD) の研究への利活用が、医療分野全体で注目を集めている。補綴学会では過去2回の学術大会で、RWDを活用した歯科研究に関する知見を共有してきた。本シンポジウムでは、これまでの知見を踏まえ、より実践的な視点からRWDの具体的な活用法や分析手法に焦点を当て、今後の歯科補綴研究におけるRWD研究の推進につなげることを目的とする。

[SY8-座長] [座長抄録] リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

[SY8-1] リアルワールドデータ解析における統計的留意点

*平川 晃弘¹ (1. 東京科学大学)

[SY8-2] 「シンポジウム8」はじめてのNDB歯科研究：基礎知識とテーマ選びのポイント

*河野 英子¹ (1. 国立健康危機管理研究機構)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム8 (研究企画推進委員会) リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

座長：笛木 賢治 (科学大)

| [SY8-座長] [座長抄録] リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

*笛木 賢治¹ (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 咬合機能健康科学分野)

キーワード：リアルワールドデータ、NDB、データサイエンス

近年、病院の診療記録やレセプト情報、ナショナルデータベースなどに代表されるリアルワールドデータ（RWD）の研究への利活用が、医療分野全体で注目を集めている。補綴学会においても、過去2回の学術大会でRWDを活用した歯科研究に関する知見が共有されてきた。本セミナーでは、これまでの知見を踏まえ、より実践的な視点からRWDの具体的な活用法や分析手法に焦点を当て、今後の歯科補綴研究におけるRWD研究の推進につなげることを目的とする。

はじめに、国立健康危機管理研究機構の河野英子先生に、「はじめてのNDB歯科研究：基礎知識とテーマ選びのポイント」と題して、臨床研究に活用可能なRWDの特徴を整理していただく。あわせて、厚生労働省が収集・管理する「レセプト情報・特定健診等情報データベース（NDB）」を用いた歯科研究の実例を紹介いただき、実践において留意すべき点や、NDBと親和性の高い歯科研究テーマについてご提案いただく。

次に、東京科学大学臨床統計学分野の平川晃弘先生に、「リアルワールドデータ解析における統計的留意点」と題して、エビデンス創出の前提となる研究デザインの考え方と、統計解析上の留意点について概説していただく。特に、リサーチクエスションの具体化、比較可能性の確保、交絡調整の位置づけを整理した上で、傾向スコア解析の仮定と限界、ならびにRWD解析結果を適切に解釈するための視点に焦点を当ててご講演いただく。

本セミナーが、今後のRWDを活用した質の高い歯科補綴研究の推進に繋がることを期待する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム8 (研究企画推進委員会) リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

座長：笹木 賢治 (科学大)

[SY8-1] リアルワールドデータ解析における統計的留意点

*平川 晃弘¹ (1. 東京科学大学)

キーワード：リアルワールドデータ、研究デザイン、統計解析

リアルワールドデータ（RWD）は臨床実態を反映する一方、ランダム化が行われないため交絡や選択バイアスへの対応が不可欠である。本講演では、RWD解析においてエビデンス創出の前提となる研究デザインの考え方と、統計解析上の留意点を概説する。特に、リサーチクエスチョンの具体化、比較可能性の確保、交絡調整の位置づけを整理した上で、傾向スコア解析の仮定と限界、RWD解析結果を適切に解釈するための視点等に焦点を当てる。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 13:50 ~ 14:40 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム8 (研究企画推進委員会) リアルワールドデータを活用した研究の実践を学ぶ

座長：笛木 賢治 (科学大)

[SY8-2] 「シンポジウム8」 はじめてのNDB歯科研究：基礎知識とテーマ選びのポイント

*河野 英子¹ (1. 国立健康危機管理研究機構)

キーワード：「1」 NDB、「2」 医療レセプトデータ、「3」 歯科研究

リアルワールドデータ (RWD) の整備と臨床研究への活用が進んでいる。臨床研究に活用可能なRWDには、電子カルテ情報、保険データベース、患者レジストリーなどがある。

このうち、厚生労働省が収集・管理する「レセプト情報・特定健診等情報データベース (NDB)」は、日本国内のレセプト情報を網羅する悉皆性の高さから、母集団代表性が期待できることが最大の特徴である。また近年はNDBの利便性・価値向上を目指し、データ提供形式の拡充や他の医療・介護データ等との連結が推進されるなど、利用環境は大きく変化している。一方で、実際に研究利用する際には留意すべき点も多い。例えば、NDBに格納されているレセプト情報は本来、診療報酬請求を目的としたものであるため、研究テーマによっては重要な臨床情報が記録されていない場合がある。また記録がある情報についても、その正確性や研究利用における妥当性については十分に検証する必要がある。さらにレセプト特有のデータ構造の理解・取り扱い、データ利用の申請・手数料等の実務的な事項についても、事前の確認と準備が研究遂行のために重要である。

本講演では、NDBの特徴とそれを取り巻く最新の動向、そして研究利用のために知っておきたいことを概観する。あわせて、どのような歯科研究テーマがNDBと親和性があるのか、具体例を挙げて考察したい。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 14:50～15:40 | Ⅱ 第1会場（ウイंकあいち 2F 大ホール）

シンポジウム4（医療問題検討委員会） このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

座長：大久保 力廣（鶴見大）、金沢 紘史（日本顎咬合学会）

共催：特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

我が国の保険診療システムの下では、学会の推奨する学術に裏打ちされたクオリティの高い補綴歯科治療を国民に提供することが困難だけではなく、私たちの大切なパートナーである歯科技工士の収入、環境も改善することはできないと考える。この現状を打破するために学会は何をすれば良いのだろうか？現制度の限界を共有し、公的保険を最低保証としつつ高品質選択肢を認める持続可能な新たな制度について考えてみたい。

[SY4-座長] [座長抄録] このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

*大久保 力廣¹、*金沢 紘史² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 日本顎咬合学会)

[SY4-1] これでいいのか！金属修復治療

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

[SY4-2] 長期QOLと持続可能性からみる補綴の保険給付と私費の在り方

*猪原 健¹ (1. 中国・四国支部)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 14:50～15:40 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

シンポジウム4 (医療問題検討委員会) このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

座長：大久保 力廣（鶴見大）、金沢 紘史（日本顎咬合学会）

共催：特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

[SY4-座長] [座長抄録] このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

*大久保 力廣¹、*金沢 紘史² (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座、2. 日本顎咬合学会)

キーワード：医療保険、補綴診療、制度構築

我が国の補綴診療費は世界的に見ても著しく低く、「保険診療費が定額・低額であるために、医院も技工所も努力しても収益が上がらない」構造的問題がある。現在の保険診療点数が継続すれば、学会が推奨する学術に裏打ちされたクオリティの高い補綴歯科治療を国民に提供することが困難だけではなく、私たちの大切なパートナーである歯科技工士の収入、環境も改善することはできないと考える。従来、学術大会とは研究者や臨床家、教育者が集まり、それぞれの成果を発表、協議し、新たな正しい知識を共有する場であり、診療収益や保険制度について触れることはタブー視されてきた。しかしながら、日本補綴歯科学会はこれまでも厚生大臣や日本歯科医師会宛に保険診療への要望書を提出していた事実もあり、「質を犠牲にした平等」ではなく、「選択と公正」を軸にした補綴医療の提供を目的に制度の再設計を協議しても良いのではないだろうか。今回、日本補綴歯科学会と日本顎咬合学会は「補綴の質を上げて収益も上げる」ことを目的に、本シンポジウムを共同で企画した。歯科医師・歯科技工士双方が納得した質の高い補綴治療を行うために、現制度の限界を共有し、公的保険を最低保証としつつ高品質選択肢を認める持続可能な新たな制度について考えてみたい。末瀬一彦先生には海外と我が国の診療費の比較や金属修復を中心とした現行の保険制度の問題点を、猪原 健先生には現状を打破するための大胆な制度改革を提案していただき、沈黙してきた補綴の保険診療の限界に一石を投じたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 14:50～15:40 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム4 (医療問題検討委員会) このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

座長：大久保力廣（鶴見大）、金沢 紘史（日本顎咬合学会）

共催：特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

[SY4-1] これでいいのか！金属修復治療

*末瀬 一彦^{1,2} (1. 関西支部、2. 大阪歯科大学)

キーワード：12%金銀パラジウム合金、金属修復の課題、CAD/CAM冠

医療保険における歯科治療では、最終修復処置として多くの場合金属材料を用いた補綴装置が提供されている。金属修復に使用されている12%金銀パラジウム合金は、金12%、パラジウム20%、銀50%以上含有されているが、金は産出量の減少や世界経済の不確実性などが複雑に絡み合って価格高騰、パラジウムは全世界の供給量の85%以上をロシアと南アフリカ共和国が占め、経済や政治情勢の変化によって価格変動しやすくなっていることから近年、金銀パラジウム合金は異常なまでの価格高騰が生じている。さらに、金属修復治療は審美不良、繁雑な製作プロセス、歯や歯肉の変色、支台歯の破折、金属アレルギーの発症など多くの課題もクローズアップされている。金銀パラジウム合金は強度や耐久性に優れるとして保険診療に用いるために開発され、1960年ごろから使用されてきたまさに「国策合金」であり、海外ではほとんど使用されていない。修復材料として医療保険に導入されるためには、生体安全性があり、価格が適正で変動しないこと、耐久性が一定期間持続すること、操作性において再現性があり、普遍的（名人芸ではないこと）であることなどが挙げられる。これまでも金銀パラジウム合金の代替材料については検討されてきたが、広く臨床応用されるには至っていない。2014年にはデジタル技術を応用したCAD/CAM冠が医療保険に期中導入され、材料研究の成果もあって適用部位が拡大されてきた。現在では小臼歯部において12%金銀パラジウム合金を凌駕する装着件数に至っている。今後ますます期待される修復材料である。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 14:50～15:40 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

シンポジウム4 (医療問題検討委員会) このままで良いのか？医療保険における補綴診療!～持続可能な制度構築をめざして～

座長：大久保 力廣（鶴見大）、金沢 紘史（日本顎咬合学会）

共催：特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

[SY4-2] 長期QOLと持続可能性からみる補綴の保険給付と私費の在り方

*猪原 健¹ (1. 中国・四国支部)

キーワード：保険給付、モラルハザード、制度設計

補綴の公的給付をめぐる議論は、これまで供給側の採算性や制度維持に焦点が当たりやすく、患者側の長期QOL、すなわち安すぎる自己負担と出来高払いが安易な補綴介入を誘発しうる点は十分に整理されてこなかった。補綴は短期の機能回復に有効である一方、支台歯形成など不可逆的介入を伴い、支台歯負担や二次う蝕、再製作を通じて「レストレーションサイクル」を回し長期予後を損なう可能性があるという時間軸のパラドックスを抱える。さらに人間は正しい情報を得ても長期的投資判断を常に適切に行えるとは限らず、私費補綴の選択はまさにその困難さを含む。加えて補綴は歯科技工士の技能と労働に依存するため、給付範囲の変更は供給体制に直接波及し得る。そのため、単一の価値観や立場に依存しない論点整理フレームワーク(FW)が必要となる。OECD各国データでは歯科医療自己負担（対GDP比）と高齢期口腔指標（65～74歳の平均現在歯数）に正の相関が認められた。これを踏まえ(1)長期アウトカムとQOL、(2)不可逆性とレストレーションサイクル、(3)行動誘導とモラルハザード、(4)公平性とアクセス、(5)持続可能性、(6)供給体制と制度整合の6軸FWを提案する。補綴給付の議論は「給付拡大」対「給付抑制」の二項対立ではなく、患者の長期利益と社会保障の持続可能性を同時に最大化する制度設計課題として扱う必要がある。自己負担設計は過剰介入抑制に寄与し得る一方、低所得者アクセス確保のため保護策や、予防連動型補助などを組み合わせ、技工供給体制の移行にも配慮した検討が求められる。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 15:50～17:50 | 会場 第2会場（ウインクあいち 6F 展示場604+605）

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

補綴歯科治療の成否と長期にわたる安定を得るためには、最終補綴装置の設計や材料選択のみならず、補綴介入前に口腔内環境をいかに整備するかに大きく左右される。本シンポジウムでは、口腔外科，歯周，矯正，補綴の各専門的視点から補綴前処置を俯瞰し，その適応，限界，および治療介入の考え方を整理することで，補綴歯科治療の予知性向上に資する実践的知見を紹介いただき、皆様と共有したいと思います。

[SY5-座長] [座長抄録] 補綴前処置を極める

*萩原 芳幸¹、*和田 誠大² (1. 日本大学歯学部歯科インプラント科、2. 大阪大学大学院歯学研究科有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

[SY5-1] 補綴処置の難易度を考えた、補綴前外科処置についての提案

*新名主 耕平¹ (1. 東京支部)

[SY5-2] 補綴前処置としての歯周治療の果たすべき役割

*菊池 毅¹ (1. 朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 歯周病学分野)

[SY5-3] 補綴前処置としての矯正治療の適応と治療戦略

*犬伏 俊博^{1,2} (1. 大阪大学大学院歯学研究科顎顔面口腔矯正学講座、2. 大阪大学歯学部附属病院矯正科)

[SY5-4] 1 歯単位から 1 口腔単位までの補綴前処置の必要性を補綴医の視点で再考する

*和田 淳一郎¹ (1. 東京科学大学大学院医歯学総合研究科生体補綴歯科学分野)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第2会場 (ウインクあいち 6F 展示場604+605)

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

[SY5-座長] [座長抄録] 補綴前処置を極める

*萩原 芳幸¹、*和田 誠大² (1. 日本大学歯学部歯科インプラント科、2. 大阪大学大学院歯学研究科有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

キーワード：補綴前処置、口腔内環境、予知性

補綴歯科治療の成否および長期的な予後を獲得するためには、最終補綴装置の材質や設計のみならず、補綴介入前にいかに口腔内環境を整備できるかに大きく依存する。歯、歯周組織、顎堤、咬合関係が十分に整理されないまま補綴処置を行った場合、その難易度が増すのみならず、清掃性の低下、過度な生体侵襲、不適切な咬合負荷などを招き、長期的な補綴装置の安定に悪影響を及ぼす可能性がある。本シンポジウムでは、「補綴前処置を極める」をテーマに、補綴歯科治療の質と予知性を高めるための前処置の在り方について、各専門分野の視点から検討する。まず、補綴処置の難易度低減を目的とした補綴前外科処置として、新名主耕平先生より歯槽堤形態の改善や歯根膜組織の生物学的特性を活用した治療戦略について紹介いただく。次に、菊池毅先生より補綴歯科治療の基盤となる安定した歯周組織環境の構築を目的とした歯周治療の役割を整理し、長期維持に向けた歯周組織マネジメントの重要性について解説いただく。さらに、犬伏俊博先生からは歯列・咬合関係を構造的に改善する補綴前矯正治療について、適応範囲、生体力学的留意点、補綴治療との連携の在り方を概説いただく。そして最後に、和田純一郎先生からは補綴医の視点で、1歯単位から1口腔単位に至る補綴前処置の取舍選択と意思決定について再考いただく予定である。本シンポジウムを通じて、補綴前処置の適応と限界を整理し、補綴治療の質と長期安定性を高めるための実践的な知見を共有したい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第2会場 (ウインクあいち 6F 展示場604+605)

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

【SY5-1】補綴処置の難易度を考えた、補綴前外科処置についての提案

*新名主 耕平¹ (1. 東京支部)

キーワード：補綴前外科処置、歯の移植・再植、歯根膜組織

補綴処置は、補綴装置の材質、設計もさることながら、補綴介入のタイミング、周囲歯周組織との調和を図ることも重要な要素であり、欠損が生じる前段階で、補綴処置の難易度を考えた補綴前処置を考えることも必要となってくる。その補綴前外科処置には、義歯作成の障害となる、骨隆起の切除、ブリッジ作成前のポンティック部位の歯槽堤増大術、歯列・歯槽骨のレベルリングなど、多岐に渡るが、近年注目されている、歯根膜組織の歯槽骨維持能、骨誘導能を生かした補綴前外科処置は、補綴装置の周囲組織との調和という観点から、後続の補綴処置を難症例化させるのを防止できる処置であり、臨床において有用と考えられる。2010年のHürzeler MBらのsocket-shieldテクニックは歯根膜組織の歯槽骨維持能を生かした技術で記憶に新しい。一方、歯の移植・再植を利用した歯根膜組織の歯槽骨維持に関しては、1950年代より報告・臨床の蓄積のある長い歴史を持った術式である。今回、演者がこれまでに経験してきた補綴処置のトラブルをもとに、補綴前外科処置として、歯の移植・再植を応用した補綴装置の周囲組織との調和を図る処置について考えてみたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第2会場 (ウイंकあいち 6F 展示場604+605)

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

[SY5-2] 補綴前処置としての歯周治療の果たすべき役割

*菊池 毅¹ (1. 朝日大学歯学部 口腔感染医療学講座 歯周病学分野)

キーワード：歯周補綴、歯周組織再生療法、歯周形成手術

補綴治療の成功と長期的維持には、安定した歯周組織の存在が不可欠である。一方、適切な歯周補綴治療は、重度歯周炎罹患患者の管理にとって欠かすことのできない治療である。この相補的關係は短期的には見過ごされがちだが、長期的に良好な経過をたどっている臨床症例を検討するにつれ、その重要性が再認識される。バイオフィーム形成が極めて容易な口腔内環境において、患歯のプラークコントロールおよび咬合性外傷のコントロールを恒常的に行い歯周組織環境の整備に努めることが、補綴前処置としての歯周治療の意義となる。歯周治療と一口に言っても、その目的は、炎症や咬合性外傷の制御、歯周組織再生、さらには歯周形成手術を応用した歯周環境の整備など多岐にわたる。本講演では、①嫌気性菌の温床となる歯周ポケットを閉鎖し、必要あれば歯周-矯正治療を可能とするための歯周基本治療、②管理しやすい歯肉ラインを形成するための歯周組織再生療法、③適切な骨縁上組織付着（旧：生物学的幅径）を回復するための骨切除療法、④ブラッシングの容易な補綴装置周囲の角化粘膜（咀嚼粘膜）を形成するための歯周形成手術、の4つを例に挙げ、口腔機能の回復へと導く補綴治療成功への道筋を考察する。”Longevity”を達成するためには、予知性の高い包括的な治療の実践が不可欠であり、耐久性のある歯周組織は、その達成に欠かすことのできない重要なピースである。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第2会場 (ウインクあいち 6F 展示場604+605)

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

[SY5-3] 補綴前処置としての矯正治療の適応と治療戦略

*犬伏 俊博^{1,2} (1. 大阪大学大学院歯学研究科顎顔面口腔矯正学講座、2. 大阪大学歯学部附属病院矯正科)

キーワード：補綴前矯正治療、歯の移動メカニクス、治療戦略

補綴歯科治療の成否は、最終補綴装置の設計や材質のみならず、補綴介入前に歯の位置関係、歯列形態、咬合関係がどこまで整理されているかに大きく依存する。歯の傾斜やスペース不足を伴う状態で補綴処置のみを行った場合、過剰な歯質削除や歯髄侵襲、不自然な補綴形態による清掃性低下、さらには不適切な咬合力の負荷による補綴装置の脱離や歯根破折など、長期的予後に影響する問題を生じる可能性がある。矯正治療は、歯や歯列を移動させることでこれらの問題を構造的に改善し得る補綴前処置であり、歯のアップライトやスペースの適正化、歯肉ラインの改善を通じて、外科的介入や補綴設計の自由度を高め、結果として補綴処置の難易度を低減し得る有効な選択肢である。補綴前処置としての矯正治療は、少数歯の傾斜改善やスペース適正化を目的とした限局矯正治療から、咬合平面や咬合高径の是正を含めた全顎的矯正治療まで、幅広い適応を有する。一方で、歯の移動には生体力学的制約や解剖学的条件が存在し、歯周組織の状態、固定源の設定、移動量や方向の判断を誤ると、歯周組織への過度な負担や補綴計画との齟齬を生じる可能性がある。本講演では、補綴前処置としての矯正治療に焦点を当て、歯の移動メカニクスの基本概念を整理した上で、補綴医が臨床に取り入れやすい矯正的テクニックを紹介する。さらに、本格矯正治療を併用した症例を提示し、補綴治療の質と予知性を高めるための矯正治療の適応と臨床的留意点について考察する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第2会場 (ウインクあいち 6F 展示場604+605)

シンポジウム5 補綴前処置を極める

座長：萩原 芳幸（日本大）、和田 誠大（大阪大）

[SY5-4] 1 歯単位から 1 口腔単位までの補綴前処置の必要性を補綴医の視点で再考する

*和田 淳一郎¹ (1. 東京科学大学大学院医歯学総合研究科生体補綴歯科学分野)

キーワード：意思決定、下顎位、戦略的抜歯

補綴前処置は多岐にわたり、理想的かつ完璧な状態を目指す、大きな介入が必要となる場合が少なくない。しかし、そのような前処置は患者・術者双方にとって負担が大きく、すべての症例で理想を追求すべきとは限らない。一方で、理想的な補綴前処置が必要な際に、自身で対応する、あるいは専門医と連携して適切に対処するための知識と判断力を備えることは、補綴医として不可欠である。さらに、最終補綴を考えたとき「補綴前処置が不要」といえる状況は稀であり、多くの症例では何らかの前処置を行った上で治療を進めることが望ましい。補綴前処置の内容は症例ごとに異なり、1 歯単位の限局矯正治療や歯周組織マネージメント、歯の移植、戦略的な抜歯や歯冠切断、骨隆起の削合から、全顎的な歯周治療、矯正治療に至るまで、幅広い選択肢が存在する。暫間補綴装置による咬合高径・水平的下顎位・咬合平面の是正も、その検査・診断と最終的な咬合位の決定に至る過程は広義の補綴前処置と捉えられる。これらの目的は、上下歯列間の受圧条件と加圧因子のバランス調整、術後メインテナンスのし易さの向上、生理的かつ安全な下顎運動の確保、高い審美性の獲得、など多岐にわたる。補綴前処置は患者・術者が共有した治療目標を達成するために取捨選択されるべきであり、同様の口腔内状況であっても、目的に応じて必要な前処置が異なって然るべきである。本講演では、これまで登壇された先生方の各論を踏まえて、最終補綴を担う補綴医の視点から、補綴前処置の必要性和適切な介入選択の意思決定を再考する。

シンポジウム

◆ オンデマンド配信あり

■ 2026年6月20日(土) 15:50～17:50 | ■ 第3会場（ウインクあいち 5F 小ホール1）

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

2025年12月に3次元プリント有床義歯が保険収載され、デジタルデンチャーは特別な技術から日常臨床の選択肢へと位置づけが変わることとなった。本シンポジウムでは、保険収載に至った背景や制度上の位置づけを整理するとともに、印象採得・咬合採得・試適といった臨床ステップ、設計・造形を含む技工作業や修理・メンテナンス、さらに臨床エビデンスについて多角的に解説する。3次元プリント有床義歯を保険診療下で安全かつ適切に活用するための理解を深めることを目的とする。

[SY9-座長] [座長抄録] 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

*金澤 学¹、*玉置 勝司² (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野、2. 神奈川歯科大学 歯学部)

[SY9-1] 保険収載の経緯とその詳細について

*小島 規永¹ (1. 愛知学院大学 総合歯科臨床教育研修センター)

[SY9-2] 3次元プリント有床義歯の臨床的エビデンス

*新保 秀仁¹ (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座)

[SY9-3] 3次元プリント有床義歯の臨床ステップ（印象・咬合採得・試適）

*岩城 麻衣子¹ (1. 東京科学大学 口腔デジタルプロセス学分野)

[SY9-4] 3次元プリント有床義歯の製作ステップ（技工作業と修理・メンテナンス）

*竜 正大¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

[SY9-座長] [座長抄録] 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

*金澤 学¹、*玉置 勝司² (1. 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野、2. 神奈川歯科大学 歯学部)

キーワード：3次元プリント有床義歯、全部床義歯、保険

CAD/CAM技術をはじめとする歯科領域のデジタル化は、補綴歯科治療の在り方を大きく変えつつある。とりわけ全部床義歯分野においては、効率性、再現性、情報共有性といった観点からデジタルデンチャーへの期待が高まってきた。2025年12月に3次元プリント有床義歯が保険収載されたことは、これまで主として自費診療や先進的な医療機関に限られていたデジタルデンチャーが、日常臨床に本格的に導入される大きな転換点である。本シンポジウムでは、「保険収載！3次元プリント有床義歯を知る」をテーマに、制度的背景から臨床応用、技工操作、さらに臨床エビデンスに至るまで、多角的な視点から理解を深めることを目的とした。まず、3次元プリント有床義歯が診療報酬制度へ導入された政策的背景や期中収載の仕組みについて整理し、保険診療としての位置づけを明確にする。次に、印象採得、咬合採得、試適といった臨床ステップにおける特徴や従来法との相違点、注意点を共有する。さらに、設計・造形・人工歯接着などの技工作業、修理・メンテナンスを含めた実践的な留意事項についても取り上げる。加えて、材料学的特性やこれまでに報告されている臨床研究結果を基に、3次元プリント有床義歯の有効性・安全性に関する現時点でのエビデンスを整理する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

| [SY9-1] 保険収載の経緯とその詳細について

*小島 規永¹ (1. 愛知学院大学 総合歯科臨床教育研修センター)

キーワード：3D printing、診療報酬改定、全部床義歯

近年、CAD/CAMを応用した補綴装置の製作や光学印象をはじめとするデジタル技術が診療報酬制度へ導入され、これらを活用した効率的かつ効果的な歯科医療の提供は、医療の質と生産性向上の観点からその重要性が一層高まっている。さらに、「骨太の方針2025」において、有効性・安全性が認められたデジタル化を含む新技術・新材料の保険導入を積極的に推進する方針が示されている。また、令和8年度診療報酬改定の基本方針においても、歯科領域の主要ポイントとして「歯科治療のデジタル化の推進」が明確に掲げられている。こうした政策的背景および技術的發展に基づき、3次元プリント有床義歯が新たに診療報酬制度へ導入されたことは、歯科補綴領域におけるデジタル化推進の大きな一歩であり、今後のデジタルデンティストリーの普及をさらに促進するものと考えられる。診療報酬改定は、改定の基本方針を踏まえて中央社会保険医療協議会で具体的な診療報酬点数などの設定が審議され、その結果が最終的な改定内容として決定される。一方、年度途中に新たな医薬品・医療機器・医療技術などが承認された場合には、随時保険収載が行われる「期中収載」の仕組みもある。3次元プリント有床義歯は、新たな製作方法を導入している点において既存技術の区分では適切に評価できないため、新機能・新技術に該当するものとして期中収載された。本シンポジウムでは、3次元プリント有床義歯の診療報酬制度への導入の経緯と仕組み等の具体的事項を共有する場としたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

| [SY9-2] 3次元プリント有床義歯の臨床的エビデンス

*新保 秀仁¹ (1. 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座)

キーワード：3D printing、全部床義歯、臨床エビデンス

CAD/CAMを応用した補綴装置の製作が一般臨床にも普及しており、補綴装置の均質性、耐久性だけでなく、情報の保存や伝達、製作期間の短縮など多くの利点を確認されている。有床義歯分野においてもCAD/CAM技術を応用した全部床義歯の製作システムがすでに実用化され、本邦でも3次元プリント有床義歯として保険収載された。これまでCAD/CAM全部床義歯の製作方法は高い精度や強度を有することから主としてミリング法が利用され、臨床的な検証においても高い評価を得ていた。しかし、レジンディスクを用いる利点がある反面、多様な全部床義歯形状を全て造形することは困難であった。一方、3Dプリントは造形形状の制限が少ないだけでなく、材料の無駄を最小限にできるサステナブルな方法であるため、全部床義歯製作にはより有用であると考えられる。しかし、3Dプリントに使用される光硬化型PMMAレジンとは異なる性質であり、材料学的特性などに関するエビデンスが少ないだけでなく、世界的にも臨床評価に関する報告は依然として少ない。安全に臨床応用するためには3次元プリント有床義歯の材料学的な特性、臨床的に生じ得るエラーなども含めて理解する必要がある。本講演では現在報告されている3次元プリント有床義歯の臨床評価や本邦での保険収載に向けて行われた他施設臨床研究の結果を踏まえた臨床的エビデンスを紹介する。また、臨床研究の経過観察で経験した症例を供覧し、3次元プリント有床義歯の実状と今後の発展性に関して考察する。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

| [SY9-3] 3次元プリント有床義歯の臨床ステップ（印象・咬合採得・試適）

*岩城 麻衣子¹ (1. 東京科学大学 口腔デジタルプロセス学分野)

キーワード：印象採得、咬合採得、Try-in

日本は世界に類を見ない超高齢社会を迎えており、口腔機能の回復を目的とした補綴歯科治療の重要性は今後ますます高まると考えられる。一方で、高齢患者の増加に伴う症例の複雑化、医療費の増大、歯科技工士不足といった課題が顕在化しており、義歯製作においても効率性と再現性を両立した治療プロセスの確立が求められている。

近年、デジタル技術の進展により、全部床義歯製作の各工程においてデジタル化が可能となり、なかでも3次元プリント有床義歯は、従来法と比較して製作工程の簡略化が可能であり、形態や咬合に関する情報をデジタルデータとして共有できる手法として注目されている。2025年12月に3次元プリント全部床義歯が保険収載されたことは、デジタルデンチャーが特別な技術ではなく、日常臨床における選択肢の一つとして位置づけられる転換点である。

本シンポジウムでは、保険診療として実施可能な3次元プリント有床義歯に焦点を当て、特に印象採得、咬合採得、試適といった臨床ステップについて、従来法との相違点や注意点を整理する。さらに、保険収載を踏まえ、臨床現場での普及に向けた課題や今後の発展の方向性について情報を共有し、3次元プリント有床義歯に対する理解を深める機会としたい。

シンポジウム

2026年6月20日(土) 15:50 ~ 17:50 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

シンポジウム9 保険収載！3次元プリント有床義歯を知る

座長：金澤 学（科学大）、玉置 勝司（神歯大）

[SY9-4] 3次元プリント有床義歯の製作ステップ（技工作業と修理・メンテナンス）

*竜 正大¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

キーワード：CAD/CAM、有床義歯、技工作業

デジタル技術を応用した義歯（デジタルデンチャー）の応用は、来院回数や技工作業の削減、質の均質化や再製作の容易さなど、様々な利点を有している。2025年12月に、我が国においてもついに3Dプリンターにて製作された総義歯が、3次元プリント有床義歯として保険収載されており、今後急速に普及していくことが期待される。

3次元プリント有床義歯は、通法によって製作される有床義歯とは製法だけでなく材料の性質も異なる点があるため、その応用には様々な注意点が存在する。保険適用に際しても、現状使用可能な材料や装置が限定されており、その製作ステップにおいても様々な留意事項があるため、今回適用となった製法について正しく理解しておく必要がある。

本講演では、今回保険収載された3次元プリント有床義歯製作ステップのうち、顎堤形態や顎間関係のスキャン、義歯の設計、義歯の造形、人工歯の接着といった技工作業について、その実際や留意点をまとめて紹介する。また、院外の歯科技工所と連携して製作する際の、歯科技工士に伝えるべきポイントや歯科技工士と確認すべきポイントについても整理したいと考えている。加えて、義歯破折時の修理やリライン、メンテナンスにおける、通法義歯との相違点や留意点、保険算定の方法など、実際に3次元プリント有床義歯による義歯治療を行うにあたって知っておくべき情報も紹介する。

本セッションが、3次元プリント有床義歯の製作と応用について正しく理解し、普及させていくための一助になれば幸いである。